

とある年の初夏。六月下旬、二十四時ごろ。

場所は、主人公と唯為理の自宅。

外は晴れ、気温は非常に心地よく、最高の季節が続いている。
そんな、気持ちのいい平日の夜だ。

主人公、寝室で探し物をしている。

これからお風呂に入るの、脱衣所にパジャマを持って行こうと思ったのだ。
……が、なぜか見つからないのである。

SE1 主人公が部屋の中を探し回る音

【最初から最後まで流す】

あれえ？　なんでだ。どうして見つからないんだろう？

昨日洗濯したばかりのを、ここに置いてたはずんだけど……。

……とりあえず、座ろっかな。

流した後、5秒ほど沈黙。

SE2 主人公がベッドの上に座る音

【最初から最後まで流す】

主人公、とりあえずベッドに座る。

今朝置いたはずの場所には、結局見当たらなかった。

だが、洗濯されたというのは考えにくい。洗濯したばかりなのだから。

……うーん。唯為理ちゃんに聞いてみようかな。

でも、今唯為理ちゃん忙しいしなあ。

ていうか、今日もやっぱり、忙しいかなあ。忙しいよねえ……。

主人公、例によって足と足を擦り付けながら、一人そわそわする。

今まで知らなかったが、自分はえっちな事を考えている時、足に出るらしい。

つまり、唯為理という時は、しょっちゅう足をもごもごさせているというわけだ。

つまり今だ。今の事である。

……というわけで、唐突だが、今、主人公は唯為理とセックスしたくてたまらない。

あの、いかにも気の弱そうなふりをしながら、自分をどこまでも侵食する、深い深い唯為理の欲望にかき回されたい……と思っている。

わかってはいた事だが、主人公は結構なマゾなのだ。

いかにも自分より立場や力の強い相手じゃなくて……一見目下のように思える相手に、ぐつちやぐちやにされるのが大好きなのだ。

……これって、相当マゾ度が高い気がする。

要するに『わかりやすいSな人じゃ足りない』って事だもんね。

だけど唯為理は今、原稿の真っ最中だ。

これから大切な新作が生まれる所なのである。邪魔するわけにはいかない。

主人公は、唯為理の作品を、基本的にはファンとして楽しみたいと思っている。

つまり、他のファンが知り得ない事は、自分もあまり知らない方がいいだろう……。と、考えている。

だから、一人だけ特別扱いはいけない。

……サインはもらってしまっただけ。イラストもいっぱい描いてもらっているけど。それでも、できるだけ、そうする努力は必要だ。と、思っている。

だから、詳しい事は聞いていない。

だが、推測できる範囲だと、今はどうやら二本同時進行で作業しているらしい。

なので、それが終わるまで……あるいはどちらかが落ち着くまでは邪魔しないようにしたい。

具体的には、期間中、えっちへの誘いは控えるのだ。

はあ。ということ、邪魔な恋人にはなりたくないから、我慢してるんだけどね。

もう、かれこれ一週間になるんだよね……。

ここ何日かは、一緒に寝る事すらままならないよ。

唯為理ちゃん。わたし、唯為理ちゃんが恋しいです。

主人公『はあああ……』と、大きくため息をつく。

すでにパジャマの事はすっかり忘れている。

……だってね、わたし。

三日前に『原稿が終わったらくさんいちゃいちゃしましょう』って言われてからこつち。

ずーっつと期待して待っては『あ、今日は無理そう』ってなるまで起きていてしまう。そんな事を繰り返してるんです。

ねえ！ 唯為理ちゃん。だからそんな愚かなわたしをそろそろ満たして？

一つもごまかさず素直になるから、いっぱいいちゃいちゃさせてほしいよ！

とは言っても、もちろん、このような事を本人に言うのは、ちゃんと、おかしいとわかっておりますので……。

主人公、ベッドに倒れ込んで、お風呂に入る事も忘れて唯為理を想う。

それから、唯為理と結ばれてから、今までとは別人みたいに素直に恋をしている自分を実感する。

これまではずっと、恋をして浮かれる事が怖かった。

いつも心に予防線を張って、傷つかないように、物事を悪い方、悪い方に考えて、相手を好きだと思ふ気持ちすら否定しがちだった。

素直に溺れていたら、誰かに『恥も外聞もなく夢中になって、バカみたい』と笑われたり、水を差されたりするような気がしたのだ。

……自分が自分の事を、そう思っていたから。

でも、実際にはそんな『笑いに来る人』はいないのだ。

わざわざそんな事を言いに来る他人はもういないし、唯為理はそんな浅ましい主人公ま
で愛してくれる。

だから、それがいるとすれば、主人公自身なのだ。

だから、できるだけ素直でいたい。

今日だって、これからお風呂に入って、できるだけかわいくして。

空振りしてもいいからドキドキ期待して『今日こそ一緒に眠れるかもしれない』『もし
かしたら、何かあるかも』って、唯為理ちゃんを待ちたい。

結局何もなくて、一人で眠る事になって、がっかりしてもいい。

仮に唯為理ちゃんが現れても、『疲れてるからダメだな』って判断して、それでおしま
いにするのだって正解だ。

でも、こんなに待ってしまう位唯為理ちゃんを好きだっていう、今の自分の気持ちだけ
は受容していたんだ。

と、思っていると……。

SE3 唯為理の足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【一番近づいてきても、まだ少し遠くで聞こえる】

唯為理ちゃんがこっちにくる！

もももつ、もしかして！

SE4 寝室の扉が開く音

【最初から最後まで流す】

【少し遠くで聞こえる】

●中央 やや遠い

「【意外すぎて驚いている。起きているとは思わなかった】

あつ……あれ？

【主人公が、寝るには半端な状態にいるし、部屋がぐちゃぐちゃなので】

何かお探し物ですか？」

〈主人公〉

「あつ。唯為理ちゃん！」

主人公、素直に舞い上がる。

もしかしたら『来てほしかった』と露骨に顔に出ているかもしれないが、かまわない。
……『えっちしたい』まで書いてあつたら、よくないけれど。

主人公、みるみるうちに期待して、興奮してくる。

もしかして。もしかして。今日こそは、もしかするのかな。

……でもまだ唯為理ちゃん、何も言っていないし。

原稿が終わったとも限らないし、迷惑かけたくないし、まだ何も言っちゃ、ダメ。

……そうだ！ とりあえずパジャマの事を聞こう。そうしよう。

〈主人公〉

「うん。唯為理ちゃん、わたしのパジャマ知らない？」

SE5 唯為理の足音2

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

唯為理、部屋の中まで入ってきて、立ったまま、ベッドに座る主人公と会話する。

●中央

「【きよんとんとして】

パジャマ……？

【察する。思い当たる節がある】

あつ。

【慌ててごまかす。本人は『うまく隠せた』と思っている】

いえ、知らないです。

お洗濯出しちゃったんじゃないですか？」

〈主人公〉

「うーん……。洗濯したばかりのはずなんだけどなあ。

ま、いいか。

唯為理ちゃんはどうしたの？ お仕事、今日はもうおしまい？」

● 中央

「【話題が切り替わってラッキー】

あ、はい！ 今日はもう寝ようかなって思ってた」

〈主人公〉

「原稿はどう？ なんとかかなりそう？」

● 中央

「はい。今描いてる原稿……二つあるんですけど。

一つは内容が決まって、描くだけなので。こっちは大丈夫です。

でも、もう一つがいまいちで。だから、今日は深追いしないで休もうかと」

〈主人公〉

「いまいちっていうのは……」

● 中央

「少し途方に暮れて」

どういう感じのえっちシーンにするか、まだ固まってないんです」

〈主人公〉

「なるほど……」

あの、何か私にできそうな事はある？」

●中央

「少し驚く」

えっ」

〈主人公〉

「直接原稿を手伝う事はできないけど、相談位なら乗れるかも。

ていうか……それを言いたくて、待ってたんだよね。

なんでもいいよ。してほしい事があつたら言つて♥」

主人公、待っていた理由自体は口からでまかせだが、力になりたい気持ちは本心だ。

作品の事は『あまり知らない方がいい』『首を突っ込まない方がいい』とは思っていたが、

唯為理から話してくれるなら話は別だ。ぜひ協力させて欲しい。

……自分から聞き出してしまったような気もするけれど。

とはいっても、具体的に何ができるのかは見当もつかない。

が……働きづめの唯為理に、ちよつとしたご奉仕ならできるかもしれない。

えっえっ、えっちとかじゃなくて、たとえばマツサージとかで、ね？

……と、思う。

対する唯為理、その言葉に、先ほどの主人公以上に舞い上がっている。

胸がいつぱいで、じーんと熱くなって、まだ何もされてないのに泣きそうだ。大げさだと笑えばいい。自分は一年中大げさなのだ。

この人の事が大好きでたまらないのだ。と思う。

だって、当然だが、主人公と交際する前は、こんな事はあり得なかった。

『こんな事』というのは、仕事が思うようにいかず、疲れてへろへろになり、もう私なんて……。と、自己肯定感がとにかく低下している時に、恋人が待っていてくれて……。し

かも、優しくしてもらおう事だ。

とにかく嬉しくて、ドキドキして『こんなの夢のようだ』と思ってしまう。だから、唯為理は、付き合い始めた頃のように緊張して、でも、はしやぐ。

●中央

「嬉しくて、上手く話せなくなってしまう。※マークまで、なんだかしどろもどろになる」
あつ……そんな風におっしやってくれるなんて。

【少し間をあけてから】
すっごい、嬉しいです……。

【少し間をあけてから】
してほしい事、言っても、いいんですか？

【少し間をあけてから】
あの。そしたらあの。

三十分。ううん、十五分でいいのでっ……」※

〈主人公〉

「うん！ 言って♥」

主人公が『おいで♥』と言わんばかりに両手を広げる。
唯為理はもう、一秒でも早くその胸に飛び込みたい。

●中央

「ものすごく嬉しい」
時間、下さい。

【少しでも早口になる】

ちよつとだけ。ちよつとだけでいいんで。

イチャイチャして、リフレッシュしたいです……♥」

〈主人公〉

「いいよ。おいで♥」

対する主人公、唯為理の言葉を聞いた途端、自分でも意外な位、自然と『年上のお姉さん』になれてしまう。

さっきまでの自分は、飢えた獣のようだった。

なのに、いざ唯為理を目にすると、なんだか優しい気持ちになれてしまう。

『この子のためなら、何でもしてあげたい』と思ってしまう。

●中央

「喜んで抱きつく」

はい！　ぎゅーっとして下さいっ ♡

SE 6　唯為理の足音3

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

SE 7　唯為理が主人公に抱きつく音

【最初から最後まで流す】

唯為理、主人公が座るベッドまで歩いて行って、飛び込むように主人公に抱きつく。
それから、夢中になって匂いをかぐ。

久しぶりの、本人から直に得る主人公の匂いだ。

肺一杯に、大好きな子の匂いを吸い込みたいと思う。

●中央　至近距離

「嬉しくて仕方ない」

ああ……♡ ふふ♡ ふふふふ♡

「うっとり主人公の匂いをかぐ。声ではなく、鼻の音で表現する」

すんすん♡ すんすん♡

「うっ」と

あなたの匂いだあ……♡

「夢中で主人公の匂いをかぐ。声ではなく、鼻の音で表現する」

すんすん♡ くんくん♡ くんくん♡

「甘えた声で。みるみるうちに興奮してくる」

ああ……この匂い、好き……♡ 今日、頑張ってよかったです♡」

〈主人公〉

「ふふ♡ おおげさだなあ」

● 中央

「※マークまで、甘えた声で」

大げさじゃないです♡

お仕事終わって『疲れたあ』ってなってる時に。

すぐ大好きな人によしよししてもらえるなんて、幸せすぎます。

こんなの♡ あなたに会うまでは、考えられなかったんですから♡」※

〈主人公〉

「……それは、わたしも一緒。

ちゅっ♡」

主人公、やはり、思っていたよりもずっと自然に、ずっと優しく唯為理の額にキスをする。

唯為理といると不思議だ。

そのメカニズムはまったくわからないが……唯為理といると、自分の性欲を否定しないまま、自然とそれをおさめて、優しく、包み込むような気持ちになれる事がある。

興奮よりもリラックスした気持ちが勝って、こんな風に、じゃれるようなキスができる。かといって、興奮が和らいだとか、えっちはもうしなくても平気と、思っているわけではないけれど……。

●中央

☆【※10秒※ キスする。甘々にじゃれあうようなキス。途中から舌を入れる】☆

★ あ♡ ちゅっ♡ んんう♡ ちゅ♡ ちゅっ♡ ちゅ♡ れろれろ……えれえれ……
♡ ちゅっ♡ んっ♡

【甘えた声で】

えへ……お疲れ様キス気持ちいい♡

【自分から積極的に二回舌を吸う】

ん♡ んんう♡

【興奮気味に、三回ゆっくり呼吸する】

はあ……はあ……はあ……♡

【唇に軽く一回だけキスする】

ちゅ♡「

対する唯為理、主人公の匂いを嗅いでキスしているうちに、すっかり興奮している。

ここに来た時はただただ優しくされたい気分だったが、今は主人公をぺろぺろ舐めて、主人公を、唇と舌でいっぱい感じたい気分だ。

——したい。早くしたい。とにかく早くそれがしたい。

一度こうなると、唯為理はもう止められない。

唯為理、主人公の左耳に近づいて話す。

SE8 唯為理が主人公にさらに近づく音

【最初から最後まで流す】

●左

「【※マークまで、甘えた声で】

あのっ。

【少し間をあけてから】

お耳もしても♥ いいですか……?」

ここでフェードアウトして終了。